

終わりの日の幻

(イザヤ2・1～5)

一、終わりの日? 後の日?

2節に「終わりの日に」とありますが、ここで使われていることばは、別の訳語にもなりません。たとえば創世記49章1節、あるいは民数記24章14節には「後の日に」と訳出されています。したがって、「後の日に」、主の家の山は山々の頂に堅く立ち、もろもろの丘より高くそびえ立つ。そこにすべての国々が流れて来る。」と訳されてもおかしくありません。現にフランシスコ訳は「来るべき時に、主の神殿の山は山々の頂として固く立てられ、いかなる峰よりも高く上げられる。すべての国は川の流れのようにそこに向かう。」と訳出しています。イザヤが預言活動をした時代の紀元前8世紀は、終末を意識する考え方が強くありませんでした。終末を強く意識するようになったのは、第二神殿時代以降であると言われています。そういうわけで、2節の「終わりの日に」を「後の日に」として読んでみたら別の発見ができそうです。

二、だれの預言?

ところで、2節から4節は、だれが預言したことでしょうか。「イザヤ書に書いてあるのだから、イザヤじゃない

ですか」と思うのが当然です。ですが、これと9割がた同じことばが、ミカ書4章1節から3節にあります。そうしますと、「可能性として3通り考えられます。第1は、イザヤの預言のことばを預言者ミカが引用したこと。第2は、ミカの預言をイザヤが引用したこと。第3は、すでにこのことばが当時語られていて、イザヤとミカが引用したことです。私は、第3が正解ではないかと考えています。

三、1節が指している範囲

1節をご覧ください。アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて見たことば。これは、2章2節以降の内容を解説している「表題のことば」です。この「表題のことば」は、12章の終わりまでを指しています。と言いますのは、13章1節に「バビロンについての宣告。これはアモツの子イザヤが見たものである。」と「表題のことば」があるからです。そして13章1節の「表題のことば」は23章の終わりまでを指しています。24章1節に新しい「表題のことば」が記されているからです。それが分かりますと、1章が何であるのかが見えてまいります。1章1節に「アモツの子イザヤの幻。これは彼がユダとエルサレムについて、ユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代に見たものである。」と「表題のことば」

があります。1章は、イザヤ書全体を意識して、何ゆえにイザヤが預言のことばを語ったのかについて、最終的な編集者によって語られたことばです。

四、テキストに聞く

そういうわけで、きょう開きました2章1節から5節を取り巻く外堀が埋まりました。今から、本丸に入ってまいります。今一度、2節をご覧ください。

「終わりの日に、主の家の山は山々の頂に堅く立ち、もろもろの丘より高くそびえ立つ。そこにすべての国々が流れて来る。」とあります。イザヤがこのことばを引用して、自らが語る預言のことばとしたとき、何を思ったのでしょうか。イザヤが語った時点では、「終わりの日」ではなく、「後の日に」の意味合いだったと考えます。と言いますのは、イザヤは第一神殿時代の預言者だったからです。第一神殿時代。それはそれはたいへんな時代でした(1章を参照)。しかしイザヤは、次の主のことばも取り次ぎしました。1章18節です。

「たとえ、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」と。このように見てまいりますと、2章2節以降の意味が、さらにはつきり見えてまいります。主は罪に対して、神への意図的な反逆に対して、厳しく取り扱われるものの、いつまでも

怒ってはおられないというメッセージです。2節は、イスラエルが回復した時の姿です。「主の家」は、エルサレム神殿です。「そこにすべての国々が流れて来る。」は、巡礼者のことです。巡礼者たちは何を言うのでしょうか。3節です。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を私たちに教えてくださる。私たちはその道筋を進もう。」それは、シオンからみおしえが、エルサレムから主のことばが出るからだ。と。私共は、この預言のことばをどのように読んだら良いのでしょうか。イザヤは「後の日に」という意味合いで語ったことと思われませんが、イザヤ書を読む多くの者たちは、翻訳に現れているように「終わりの日に」の意味合いで捉えています。それでかまわないと思います。(ここは、新約の光を当てて読む必要があります)主イエス・キリストの出現により、エルサレムの意味が変わりました。シオンから出るみおしえの意味が変わりました。エルサレムは教会であり、シオンから出るみおしえ、及びエルサレムから出る主のことばは、主イエス・キリストです。今は、神は聖霊によって語り、教え、罪赦された罪人である私たちと交わってください。神は、罪人をそのままの姿で赦し、受け入れるために、御子イエス・キリストによる十字架の贖いの計画を成し遂げてくださいました。